

〈いま、なぜ賀川豊彦か〉

「明治学院と賀川豊彦」

明治学院同窓会 於 明治学院礼拝堂

2018年1月21日 加山 久夫

I 忘れられた巨人 賀川豊彦（1888〔明治21〕～1960〔昭和35〕）

（1）「世界のカガワ」

- ・大宅壮一「噫々 賀川豊彦先生」

「明治、大正、昭和の三代を通じて、日本民族に最も大きな影響を与えた人物ベスト・テンを選んだ場合、その中に必ず入るのは賀川豊彦である。ベスト・スリーに入るかもしれない。

西郷隆盛、伊藤博文、原敬、乃木希典、夏目漱石、西田幾太郎、湯川秀樹などと云う名前を思いつくままにあげて見ても、この人達の仕事の範囲はそう広くない。

そこへ行くと我が賀川豊彦は、その出発点であり、到達点でもある宗教の面はいうまでもなく、現在文化のあらゆる分野に、その影響が及んでいる。大衆の生活に即した新しい政治運動、社会運動、組合運動、農民運動、協同組合運動など、およそ運動と名のつくものの大部分は、賀川豊彦に源を発していると云っても、決して云いすぎではない。

私が初めて先生の門をくぐったのは今から四十数年前であるが、今の日本で、先生と正反対のような立場に立っているものの間にも、かつて先生の門をくぐったことのある人が数え切れない程いる。

近代日本を代表する人物として、自身と誇りをもって世界に推挙しうる者を一人あげようということになれば、私は少しもためらうことなく、賀川豊彦の名をあげるであろう。かつての日本に出たことはないし、今後も再生産不可能と思われる人物——それは賀川豊彦先生である。」（『神はわが牧者—賀川豊彦の生涯とその事業—』田中芳三編著、1960）

- ・アラン・ハンター『三つのトランペットが鳴り響く ガンジー・シュヴァイツァー・カガワ』（1923）

- ・戦後、ノーベル平和章候補三回、ノーベル文学賞候補（日本人初）2回。

（2）しかし、没後、賀川の名は急速に忘れ去られていった。

「明治学院、お前もか」

（3）「甦る賀川」（「カガワ・ルネッサンス」？）

II 明治学院時代の賀川豊彦

徳島時代

（1）徳島中学時代

- ・賀川の不幸な生い立ちと少年時代—父と芸者との間で神戸で生まれ、4歳の時、両親が相次いで死去した。その後、徳島の父の実家で義理の母（父の正妻）のもとで暮らす、孤独な少年時代であった。その中で、徳島吉野川の美しい自然に慰められ、自然観察に深い興味を持つ。それは、賀川のライフワークとなった『宇宙の目的』（毎日出版社、1958年）の刊行に至る。

- ・戸籍を偽り、1年早く徳島中学受験（約700人、合格者160名中、5番で入学、卒業前年の成績も5番）。

徳島中学在学中、ローガン、マイヤース両宣教師（米国南長老教会）との出会い、両宣教師夫妻の愛に触れ、信仰に導かれる（16歳のとき、受洗）。

- ・同じ教会の6歳上の森茂青年との出会い。森は村はずれに住むハンセン病患者を訪問し、軍隊に入隊してからも支援をつづけた。後に、小説『一粒の麦』の主人公とする。

その頃から、トルストイ、安倍磯雄、木下尚江らキリスト教社会主義者から影響を受け、非暴力主義、非戦平和主義に立つ。

教練の時間に銃剣をもつことを拒否して、教官に殴られる。彼の平和主義は生涯に及ぶ。（もっとも、太平洋戦争中、軍部に協力するようになったのではないかと、この平和主義者賀川の「転向」批判をする研究者もある。戦時下、三度にわたり官憲に拘束された賀川の平和主義の問題については、十分慎重に検討されなければならないと思う。）

また、賀川は後に労働組合や協同組合などの組合運動を展開するが、既に17歳のとき、石川三四郎『消費組合の話』（平民社）を読んでおり、明治学院高等部に進学した時にはすでに組合運動に関心を向けていた。賀川の一級下で、同じ寄宿舎で生活していた村田四郎はつぎのように書いてい

る——「中山正樹はその頃からダンテを学びはじめて居たし、賀川豊彦は社会科学と組合運動に眼を向けていた。」（村田四郎「学院に学んだころ」『明治学院五十年史』）

（2）明治学院高等部神学科予科へ

明治学院時代（1905〔明治38〕年4月～1907〔明治40〕年3月）

- ・ 日露戦争への批判的見解を演説した夜、先輩から鉄拳制裁をうけたり、日本海海戦勝利後、東郷大將が品川駅を通過するので歓迎に明治学院の全校生徒が出かける際にも、参加しなかった数名の学生の一人だった。沖野岩三郎は、「学院には吉岡徹、関口幸四郎という猛烈な非戦論者がいて学内で自由に活動したので、平和論者の賀川豊彦君と親しくなり、研究会などでずいぶん過激な事をいったが、オルトマン博士が常に我々の議論を弁護してくれたのでばっせられることもなかった。」（「非戦論の青年たち」と、当時の雰囲気伝えてる）
- ・ 寄宿舎の自室に路上の物乞いを連れてきたり、捨て猫を拾ってきたりして、友人たちの矚目をかったこともあった。
- ・ 賀川は猛烈な読書家であり、面白くない授業中に哲学や宗教などの本を持ち込んで読んだり、授業をさぼったりしたという。賀川は友人たちから「本の虫」とか「超然」とか呼ばれたようである。彼は次のように語っている。「若し明治学院にあの当時あの様な立派な図書館が無かったならば、私は明治学院を早く捨てて居たかも知れない。実に私は一生を支配する程の知的満足を、明治学院の図書室から獲得し得たのであった。」（「腹這ひして見た蜃気楼」）
- ・ 賀川の平和主義とキリスト教（人格）社会主義
予科2年生の夏休みに帰郷した際、「徳島新聞」に掲載されていた鈴木券太郎徳島中学校長の「帝国主義について」に対して、「鈴木券太郎氏に寄す」を同紙に寄稿して反論。続いて、「世界平和論」を投稿、7回にわたり掲載された。

III 明治学院から神戸神学校へ

1. 賀川の正統的キリスト教とリベラリズム：「贖罪愛の実践」
2. 賀川の実践的キリスト教（「行動するキリスト教」）
3. 神戸貧民街へ（1909～1923）

IV 救霊救貧活動から防貧運動へ

1. セツルメント（隣保活動）
2. 防貧としての社会運動・組合運動——「一人は万人のために、万人は一人のために」（“One for all, all for one”）——
 - （一）労働組合運動・農民組合運動・協同組合運動・普選運動・無産政党樹立運動
 - （二）賀川社会運動の集大成としての協同組合運動：ゲマインシャフト（共同体）とゲゼルシャフト（利益社会）→ゲノッセンシャフト（協同組合）
3. 平和運動：世界連邦運動・「世界国家」

V 明治学院大学のモットー“Do for Others（他者への貢献）”（マタイ福音書7章12節）

- （1）明治学院の〈ミッション・スピリット〉〈ボランティア・スピリット〉の源流としてのヘボンと宣教師（ミッションナリー）たち（その源には、キリスト教のミッション・スピリットがあった。）
- （2）卒業生・教授・理事賀川からの明治学院への贈りもの——
 - （一）明治学院神学部と東京神学社との合同に際して、昭和3年、田川大吉郎総理は賀川豊彦らと相談して、神学部で代わるものとして社会科を設立。
川本彰「社会学部20年の歩み」——「田川総理は（合併して日本神学校となった神学部）のかわりに明治学院の中心の学科として社会科を考えられたのです。田川先生はこの時、賀川豊彦、遊佐敏彦などに相談されて、次のような精神で社会科創設を考えられました。それはヨハネ伝のなかにありますけれども、‘友のため己の生命を捨てる、これより大いなる愛はない。’こうして社会学部がスタートいたしました。（1985年11月30日、社会学部設立20周年記念講演会）『社会学部20年の歩み 記念樹とともに』明治学院大学社会学部設立20周年記念事業委員会、1985年）

また、『社会学部20周年の歩み 記念樹とともに』の巻頭言「社会学部設立20周年を祝して」において、当時の森井眞学長は次のような言葉を寄せている——「賀川豊彦の名を我々がしばしば挙げるのは、賀川が有名だからではない。賀川豊彦こそ明治学院の理念をみごとに生きた先輩のひとりだと思ふからである。その労働運動や組合活動は、今日でさえおそらく本学の内外で〈彼は傾向のある人だ〉〈過敏（激？）だ〉などと批判を受けるにちがいないほどに大胆な冒険であり、先駆的な仕事だった。しかもそれは堅い信仰とそれから発するやみがたい人間愛に基づき、だからこそその活動は国境を越えて広く世界に及んでいたのである。」

専任教授として明治学院大学二部の授業（明治学院大学発足の1949より「協同組合論」と1952より「経済心理学」）を講義し、優秀レポートには謝礼を用いて賞（奨学金）を与えた。賀川は明治学院大学発足当時の理事でもあった。

(二) 明治学院生協の創設への支援——労金から30万円の融資の斡旋と1万円の寄付（当時、公務員の初任給6000円）

(三) 寄稿：

ア 「文明の真相と其発展」（『白金学報』7号、1905年12月）

イ 「個人的人文史の発展より社会主義の結論に及ぶ」（『白金学報』8号、1906年3月）

ウ 「腹這いして見た蟹気楼」（『明治学院50年史』）（1927）

エ 「学生時代に於ける精神修養」（『明治学院時報』46号、1937年）

オ 明維持学院創立七十年記念講演（1947）

カ 「白金聖歌」（1947）

キ 自伝的手記「わが村を去る」（『明治学院100年史』1977）

(四) 寄贈図書：賀川文庫（約13000冊）（現在、賀川豊彦記念松沢資料館に永久貸与）

(3) 明治学院の〈果実〉〈成果〉としての卒業生：〈賀川たち〉（賀川の後輩として）

明治学院のキリスト教精神（「贖罪愛の実践」「行動するキリスト教」）

ボランティア・スピリットの継承（学問、職業、社会活動、他者への奉仕）

・これからの暗い時代にいかにして希望の光を掲げるか？

「立てよ若人白金の 丘に使命の声ききて 黎明さませ呼びさませ」

（賀川豊彦作詞「白金聖歌」1947年より）